ジャンヌ ～願いの香りと薔薇の祈り～

ルピナス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジャンヌ ～ 願いの香りと薔薇の祈り～

【Nコード】

N7401K

【作者名】

ルピナス

【あらすじ】

寂れた街の片隅でひっそりと花屋を営む女性ジャンヌ。彼女の嫌いなものは、ベタベタした馴れ合いと店の常連客ロイの笑顔だった。

なりゆきで連れて行かれた食事会で予想外の人物に出会い、ジャンヌの運命は動き出した。

プロローグ

「頼む！殺さないでくれ！お願いだ。俺は何も知らないんだ」

後手に縛ったロープを解こうともがいていた男は、私の手に握られた黒光りする物を目の当たりにして態度を一変させたのだった。

「どうだか……な」

「ほ、本当だつ！嘘なんかついてないっ……そう、そうだ。研究のことを知りたいならパスワードを教えてやる。だから」

「悪いが……」

私は男の視線までしゃがみこみ旧世代の武器、リボルバーを男のこめかみに押付けて言った。

「……必要ない」

私の冷たい返答に男の顔色が青白く、血の気が引いていくのが分かった。暑くもない空調の効いた部屋にも拘らず、額には大量の汗が滲んでいる。

「頼む……」

「罪もない人間が死んだ。何人もだ。お前と同じ様に『殺さないでくれ』と言った言葉をお前は聞かなかつたというのか？」

「……そ、それは……」

男は目を伏せた後、また自分勝手な理屈を並べ立てた。

「でも、俺だけのせいじゃない！俺だって逆らえなかったんだ。仕方なかったんだっ……」

私は引き金を引いた。黄金色のシリンダーが力チリと回る。

その音を聞いて男はビクリと震え、顔を更に引きつらせた。

「や、やめてくれ……」

声は擦れていた。

刹那、私はもう一度引き金を引いた。

男は目の前にぐったりと倒れこんだ。

「さて、仕事に取り掛かるか」

私は立ち上がると、近くにある青く光ったコンピュータ画面を覗き込んだ。既に大半のデータは拝借済みだったが、念のために取りこぼしがないか最終確認をしているところだった。側に倒れている男に見つかったのは私のミスだ。といっても大した支障はない。

「メインコンピュータは調べつくしたが……これ以上の……情報は
ないか……」

キーボードを叩きながら呟いた。

どんなセキュリティシステムも私の前には意味をなさない。

私は革張りの椅子にもたれかかり息をついた。そして側に倒れて
いる男を見下ろした。この男は何しにここへ来たのだろうか。今日
は休業日のはずだ。警備員は全員眠らせてあるし、第一この部屋は
ヘルス・ファーマシーの会長室だ。一社員にすぎない男の来る様な
場所ではない。

「……念のため、と」

黒い手袋をしたままの手で私は男の体をまさぐった。すると、ス
ーツの襟の内側にあるタグに違和感を感じて、それを剥ぎ取った。

「チップ……かな。さて、どんな情報が入っているのやら」

その一見してただの布切れ思しき物と盗み取ったデータを収納し
たディスクを手に、私はそこを立ち去った。

そしてその『一見してただの布切れ』は、思わぬ人物の事件関与を示すパンドラの箱だった。

ジャック・ウォリアーノ……世界治安維持連合にも属する我が国の諸国連合警察組織、その次期理事と目される男の名が記されていた。

第1話 ボルドーの香りに誘われて1

「お願い！この通り！これも人助けだと思って、ネ？ 今回だけだから」

後生だから、と大袈裟に両手を合わせて目の前で頭まで下げている彼女は、私の親友だ。

蜂蜜色に輝くクセ毛交じりの髪を後ろで結い上げ、一部下ろした巻き毛が可愛らしく揺れている。瞳は、琥珀色でくるりと上向きのまつ毛が瞳を可愛く着飾っている。

そんな美少女な親友の必死な懇願姿は珍しい。

胸元が大きく開いたスパンコールドレスを身に纏い突如私の店にやって来た彼女は、「一生のお願い」と言ってきた。

ハイクラスな男どもとの合コンへ向かう途中らしいのだが、女性側に穴が空いてしまい、それを私に埋めて欲しいというのだった。

他に当てが無かったのだろうか。あるう事かこの私に「男」絡みで頼み込んでくるとは。

「無理だ！話が合わないんだよ、そういうエリートお坊ちやま系の男とは」

店内の花を片付けながら私はきっぱりと断った。

それでも美麗は執拗に食い下がってくる。どうやら既に狙った獲物がいるらしい……と私は推測した。

「いてくれるだけでいいの！ 食事はフレンチなのよ。なんならボルドーのワインもつけるわ！ どう？」

それは驚くべき譲歩の言葉だった。あの美麗が、金に執着し且つ目の色を変える筈のあの美麗が、私に何かを奢ると言い出した。

絶対に明日は、槍もしくは弾丸が降る！

「他にもいるだろう？ 喜んで即答してくれそうなのが。よりにもよって私に頼むのか？」

「私だって不本意なのよ！ 仕方ないの。お店への待ち合わせ時間

まであと5分しかないんだもの！時間がないの。考えてる余裕なんてないわ！ 選択肢は一つなのよ」

なるほど。私はその説明で納得した。つまり、時間に間に合うという条件を満たす圏内に「私」しかいなかったわけだ。

「だが、今からだろう？店の片付けもあるし。何よりドレスなんか持ち合わせが無い」

「それなら大丈夫ですよ。ジャンヌ様」

声のした方を振り返ると、帰ったとばかり思っていた色白で細身の少年、フェクト・S・ジェンスーが、白い大きな箱を抱えて裏口に立っていた。

「フェクト」

「片付けなら僕がやっておきます。それにドレスならコレがあるじゃないですか」

そう言つて、手にしていた箱を私の前に差し出した。

その深紅のリボンがかけられた白い箱には見覚えがあつた。

「嫌だ！それは開けたくない」

「そう言わずに、せつかく頂いたんですから……」

「絶対、絶対、絶対に嫌だ！あの男に貰った物だけは」

私とフェクトが言い合いをしていると、美麗は勝手にリボンを解き箱を開け放つた。

「あつ、おい！」

中には、ワインレッド色のドレスとルビーのペンダントが入っていた。

「あるじゃないの！ さつ、コレ着て行くわよ！」

「いや、だから私は……」

「つべこべ言わないの！ ボルドー飲みたくないの？！ 私が奢つてあげるのよ？ 文句ないでしょ」

頼みごとをしにきた割には上から目線なのが気になったが、確かにワインの誘惑は魅力的だった。最近仕事続きで忙しくゆっくり酒を味わう所ではなかったのだ。

軟弱で決められたレールの上しか歩いた事の無い様な男にまったくもって興味はないが、濃密な香りの漂う深紅色のボルドーには心惹かれるものがある。

脳内にワイングラスに注がれたボルドーが浮かび上がると私はたちまちその誘惑から逃れられなくなった。

「ラトゥール1974」

私が、ぼそりと呟くと彼女は渋い顔をして言った。

「マルゴー1986年で」と。

第2話 ボルドーの香りに誘われて2

酒の席が嫌いなわけではないが、他人との会話を楽しむ事すら稀な私にとつて、好きでもない男どもに笑顔を振りまきながら会食するのはうんざりする行為だった。旨い酒も不味くなる。

大して役に立つ情報が得られる訳でもないだろうに、何が楽しくて合コンなどするのか。どうせ世の中、男と女の2種類しかないのだ。わざわざセツティングなどしなくても、道を歩けば男に行き当たるではないか。それがA級品かB級品かは別としてだが。

親友いわく『だからこそ品定めが必要なんじゃない。それに、女はね綺麗って言われるから美しくなるのよ』なんだそう。

私には理解不能な理屈だった。外面のパーツなど80%が生まれ持った遺伝子のなせる業で、後の20%は、後天的な努力でカバーするものだと思うのだが。

いや、つまり、その後天的な努力が……コレ？　なのか？　だとしたら、随分と他力本願な努力だ。

それに引き換え、ワインは最高だ。人の努力の結晶なのだから。華やかな香り、滑らかな口当たり、それでいてしっかりとした繊細な味わいがあるボルドー。私の一番はラトゥールだが、マルゴーもなかなか捨てがたい。

実に鬱陶しい合コンだが、親友美麗みれいの頼みでもある事だし、ボルドーに免じて今回だけは折れてやることにしたのだ。

幸いな事に私の前の席には誰も座っていない。無理矢理連れてこられたが、肝心の合コン相手の男も未だ人数が1人足りない為だ。連絡すら取れない事を丁寧に謝罪していたが、むしろこのままの方が私には都合が良い。おかげで思う存分ボルドーを味わうことが出来るのだから。

私の手の中にあるグラスは深紅色の液体が照明の光を反射してルビー色に輝いている。それはもう、うっとりするくらいに

「綺麗だ……」

「ワイン、お好きなんですか？」

突然、背後から声をかけられて思わず肩がビクリと震えた。

しまった。私とした事が。背後の気配にも気が付かない程ポルドーに夢中になりすぎてしまっていたとは。途端にあきれ果てた顔をしながら、お決まりの説教文句を口にするフェクトの姿が脳裏を過ぎった。

「なんだ、やっぱり来たのか！ 調度お前の話をしてた所だったんだ。座れよ」

「ああ、遅くなってごめん。ありがとう」

私の背後にいた人物は勧められるままに私の目の前の椅子に腰をかけ、ニツコリと笑いかけてきた。

「僕もワイン好きなんです」

再び笑顔を見せるその男は、まるで、自分は無害だと主張するかの様だった。

背はお世辞にも高いとは言えないが、漆黒の髪、切れ長で灰緑色の瞳にスーッと細く通った鼻筋、綺麗な八頭身を思わせる小顔で、そこに浮かんだ柔らかい笑みは、私から見ても良い男の部類には入るだろうと思われた。

「紹介するよ。こいつが今話していた佐野財閥の御曹司、レイモールだ」

女性陣の顔が笑顔でゆるみ、瞳はダイヤモンドの如く輝いて紹介されたレイモールの顔を見つめていた。

私は内心溜息をつき、ポルドーとの至福の時間が終わった事を悟った。

「始めまして。レイモール・佐野・ウイストーンです。遅れて申し訳ありません」

「お気になさらないで。重要なお仕事がおありだったのでしょう？」
にこやかな笑顔を作るのは美麗だった。

付き合いの長い私にしか分からないであろう、その内側に隠れた

黒い仮面が、こいつが目当ての獲物なのだと私に語っていた。

「わたくし、美麗・アンジェリーナ・シールズと申します」

美麗は満面の笑顔という仮面を貼り付けて自己紹介した。

第3話 ボルドーの香りに誘われて3

聞けば何の事はない周りと同じお坊ちゃまで、やはり私の好奇心
センサーは反応しなかった。

「まあ！ 曾祖父様が佐野製薬の創始者でいらっしやいますの？」

一オクターブ高い声で話すのは、琥珀色こはくの瞳をキラキラさせた美
麗だ。

「はい、もう一線は退いていますが。その力量は僕など足元にも及
びませんよ」

「あら、ご謙遜けんそんですね」

美麗みれいが微笑むとそれだけで男どもがボーっとなる。

「実績で言えば、僕なんかよりもベンダーの方が上ですよ。何と言
つてもあのヘルスフアーマーシーの専務ですからね」

金や色濃い沙汰には無関心な私だが、美麗の容姿とそこから溢れ
出る魔性の気に魅せられた男どもの中に、私の脳内を刺激する者が
一人だけいた。それが、たった今話題に上がったベンダー・フリ
ンジ・ラパール。先週、裏稼業の依頼で盗みに入ったヘルスフアーマ
シー社の専務であり社長の息子だ。

「専務と言っても僕は単なる父の補佐だから、レイモールに比べた
ら全然」

全然と言いながら、顔は自信に満ちた表情をしている。

何に対しての自信なんだか。今すぐ糾弾してやりたい思いを抑え
つつ、一応ベンダーと呼ばれた男に近づく為の策をあれこれと模索
しながら、本人達は楽しいであろう社交辞令じみたくだらない会話
が目の前を飛び交っている中、私は早々にメインの鴨肉のロースト
を平らげた。そして、二本目のボトルからグラスにワインをなみな
みと注いだ。

美麗が後から参入してきた佐野財閥の御曹司に目をつけてくれた
おかげで、私は面倒な会話をしなくて済んでいる。おかげで当初の

予定どおり気兼ねなく愛するボルドーに舌鼓したつづみを打っている。
はずなのだったのだが……。

落ち着かない。

それというのも、御曹司が美麗を含めた女性たちと会話をしているにも拘らず、必ず会話の途中や最後に、私に向かって笑いかけからなのだ。

私を他の女性と同じに扱っているつもりなのだろうか？だとしたら余計な気遣いだ。どうにかして止めさせなければ、せつかくのボルドーが台無しだ。

「失礼だけど……」

私は、美麗の意識が食事に集中している一瞬の間を狙って御曹司に話しかけた。

「はい。何でしょう？」

ほんのりと赤みを帯びた頬で御曹司は優しい笑顔を向ける。

一瞬、何かが喉に詰まったような気がした。

「いや、だから、その笑顔、止めてもらえないか」

「はい？」

「だから、私に笑いかけるのは止めてくれ。人に見られながら食事するのは嫌いなんだ」

当然の事ながら男はキョトンとした顔をした。

だが、直後にクスクスと笑いを漏らしたのだ。

「何が可笑しい？」

エリート特有の人を見下した笑いか？ 私をバカにしているのか？

「いえ……違います……可笑的いものでは……ありません……よ……ふふっ」

「貴様っ」

「ああっ、すみません。違います。ただ、懐かしかったものですか」

「……懐かしい？」

何が言いたいんだ。

「相変わらずですね。少しも変わっていないんですね。ユーナさん」
思わず手にしていたグラスを落としそうになった。目の前の御曹
司は、教えてもない私の幼少時の名を口にしたのだ。

第4話 パーティー

ユーナ。

その名で呼ばれたのは何年ぶりだろう？ 10年、いや11年か。まさか、あんな場所で幼少時代の知人に出くわすとは思ってもよらなかった。

「あなたにお礼を言うべきなのかしらね。ジャンヌ」

クリーム色のドレスに身を包んだ美麗が、不適な笑みを浮かべて私の顔を覗き込んでくる。

「……さあ？」

馬車の外を流れる景色をボーッと眺めながら適当に答えた。

「ユーナって呼んでたわね、彼。もしかして昔の？」

「……は？」

「彼、随分親しげに話しかけていたわ。それにあなたに会えてとても嬉しそうだったもの。何かあったのではなくて？」

何があったというのだ。ただの知人だと何度も言っているだろうが。

「ないよ」

「本当かしら？ ユーナってあなたの……」

「ああつもう！ いい加減にしてくれ！ 本当にただの知人なんだ。畏^{かしこ}まつて言えば学友だ。それ以外にない」

驚いた顔を見せた後、美麗は黙り込んだ。

だが、その顔はまだ完全に納得したという表情はしていなかった。それでも、本当に何もないのでから本来私が弁解する必要などないのだ。第一、美麗が目をつけた、金づもとい「貴族様」を横取りする程、男にも金にも飢えてはいないし興味などありはしないのだ。

「到着いたしました」

御者が声をかけてきた。

「そう。ありがとう」

美麗が答えてから数分後、馬車はゆっくりと停止した。外はとも静かで、人の足音も荷馬車を引く馬の蹄の音も聞こえてこない。本当に此処がパーティー会場なのだろうか？ 馬車の中にいるとはいえ、人の気配が少なすぎる。

一週間前に届いた佐野財閥御曹司からの招待状には、日時とドレスコードが明記され、当日迎えをよこすただけ書かれていた。断るつもりで佐野財閥への連絡先を調べたが、沢山ありすぎてレイモールの所在にたどり着く前に疲れてしまい……要は面倒になって放置していたのだが。本当に向かえの馬車がやってきて、驚いたことに美麗が既に座っていたのだ。はつきりいつて私は行く気はさらさらなかったのだ、その場できっぱりすっぱり辞退した。他にやらなければならぬ仕事も詰まっていたのだ。すると、御者は「お二人でなければパーティーには参加できません」と断言したのだ。

焦ったのは私ではなく美麗だった。男を落とす為の準備万端な彼女は、「行くのよ！」と必死な剣幕で私を馬車へと引っ張り込み、途中の店でドレスを見繕うと、またも有無を言わさぬ勢いで連れ出されてしまったのだ。

こんな余分な買い物をして、フェクトになんて報告すればいいのか私は言い訳に悩んでいた。それに、今夜はまた仕事をする計画だったのだ。今頃、ブツブツと私の愚痴を零しながら店を閉めているであろうフェクトの顔が思い浮かんだ。

仕方がないが、パーティーが終わってから計画を実行するとして、フェクトには土産でも持って帰るとしよう。

「ちょっと遅いわね。まだ、かしら？」

美麗は苛立たしげに言った。

髪飾りや化粧を何度も確認しながらおしていた美麗も、しびれを切らしたようだった。

だが、確かに御者が確認に行ってから随分と時間が経ったような気がする。

「見てこようか？」
私が腰を上げようとするとき、馬車の扉は開かれた。

第5話 パーティー2

馬車を降りると白い壁のロココ調の館が聳え立っていた。見上げると首が痛くなつてしまいそうなのそれは、もはや城と言つても過言ではない程の大きさだった。

体のラインを鮮明に浮き立たせるマーメイドドレスを優雅に着こなす美麗は、勧められるままに躊躇する事無く扉の中へと入つていった。ここまで来て後には引けないので、仕方なく私も後に続いたが、ドレスの裾がまとわり付いて歩き辛いことこの上ない。

「ようこそおいで下さいました」

そう言つて出迎えてくれたのは、招待状を送りつけてきた御曹司ではなく、黒い服を身に纏つた使用人らしき人物だった。

「ジャンヌ様と、美麗様でございますね？」

「レイモール様から招待状を頂いたのですけれど」

美麗はレイモールという名を強調して、使用人の男に言い放つた。これは御曹司であるレイモールはどこにいるのか？ 早く会わせる！ と遠まわしに言っているつもりなのだ。

「はい。伺つております。レイモール様は、只今パーティーの準備でお忙しい為、代わりに私が丁重にお二方をご案内する様にと、仰せつかりました。御挨拶が遅れましたが、チャールズと申します」

美麗の迫力に押し負けることなく説明すると、使用人の男チャールズは、流麗な身のこなしで私達二人をフロアへと案内し始めた。

「こちらへどうぞ」

館の中に入ってみれば意外にも招待客は多く、華やかな雰囲気色彩られていた。テラスやラウンジにはグラスを片手に寛いでいる者が見受けられ、館のあちこちで使用人らしき者達が慌しく動き回っている。となれば、主催者側であるレイモールは、きっと食事を取る暇もない程、時間に追われているのだろう。

貴族連中はつくづく派手な事が好きだな。よほど時間を持て余し

てるとみえる。何処で作らせたならそんなデザインが出来上がるのかと思うほど斬新な色使いのタキシードや、目が痛くなる程煌びやかな光を湛えた宝石を一面に散りばめたドレスなど、何を主張したいのか問いたくなる服を纏った輩がゴロゴロしていた。

仮装？ いや悪趣味露出パーティーだな。

そんな連中を見て、招待状に書かれていたドレスコードは、私達への特別指定なのだ と理解した。撫様な格好をしなくて済む為の私達への配慮なのか……。

だが、かえって私達の服装は、不思議なほど浮きまくっていた。美麗も私も、装飾など施されていないシンプルなマーメイドドレスだったからだ。美麗のそれは淡い杏子色で、踝から膝の辺りまで裾が斜めのフリルになっている。肩にかけてラベンダー色のシフォンシヨールが彼女の蜂蜜色の髪を引き立たせていた。

私はといえば、鶯色の暗くてにぶい緑。裾も美麗とは違い、足元のフリルが僅かに広がっている程度。私の朽ちて煤けた枯葉の様な髪色に、この服が似合うかどうかは別にして、とにかく………動きにくいドレスだ。いや、ドレス自体が既に動きを制限する衣類なのだが。

サイドの布を手で引き裂いて、太もも半ばまで即席スリットを入れたい衝動にかられていた。そういえば、あの男が押し付けていたヤツもマーメイドだったな。

足に絡む布をどうにかして払いながら足を進めていると、前を歩くチャールズが向かった先は、2階へと続く階段だった。周りの招待客たちと同じテラスか、ラウンジへ案内されるのかと思っていたのだが。

「受付はしなくて良いのか？」

何気ない私の小さな呟きに、果たしてチャールズは丁寧に説明した。

「お二人はレイモール様の特別なお客様ですので、受付などは必要ございません。特別室をご用意させていただいております」

『特別』 という言葉に美麗が気を良くしたのが、後ろにいた私にも伝わってきた。

それも、『配慮』 だろうか。何にしても、妬み混じりの社交辞令合戦や野次馬根性を恥とも思わない好奇の目にさらされなくて済んだのは幸いだ。

私達は、素直に使用人の後に従った。

階段を登らなければならなくなった私は、またもドレスの裾と格闘しながら慎重に足を進めた。しっかりと手すりに掴まり足と布が絡み合うのを防ぐのに必死だった。

あー！ くそっ、イライラする！

すると、ふいに前方を歩いていていた美麗が立ち止まった為、思わず裾を踏みつけそうになった。

「つつっ！ どうした？」

美麗の視線を辿ってみると、そこには厳めしい顔つきの男が鋭い目つきで立っていた。

「その者達は誰だ？」

誰だ？ と聞きながら、この場に相応しくないから追い帰せ、と言われている様な気がしたのは私の気のせいではないだろう。

「レイモール様のご友人でございます」

銀髪で80歳前後くらいであろう老紳士は、私達を下から上までじつくりねめつけると、ふんつと鼻で一蹴した。

このクソじじい、と思いはしたがアウエーでそれを口にする程バ力ではない。使用人が慇懃いんきんに頭を下げる場所を見ると、この家の人間に間違いはないだろう。

私たちも彼に習って頭を下げると、老紳士が去った後に、酸味のある果実のような香りが私の鼻腔を刺激した。

使用人は2階の長い廊下を歩きながら、先ほどの老紳士がレイモールの曾祖父であり、佐野財閥創始者でもある現会長なのだと教えてくれた。

曾祖父ということは100歳近い年齢のはずだが、それにしては

見た目が若かった。それとも、年を取ると70歳でも100歳でも
余り外見に違いはなくなるのだろうか。

「失敗したわ。もっと印象付けておくんだっただわ」

美麗は悔しそうに小声で呟いている。

どこまでも金の事にしか頭がない親友に呆れてはて溜息をつくど、
使用人の男は重厚な装飾が施された大きな扉の前で立ち止まった。

「こちらでございます」

開け放たれた観音扉からは、バラの甘い香りが漂っていた。

第6話 薔薇の香り

曲線を優美に配したロココ調の館にあって、案内された部屋は実に控えめな装飾で、見た目にはとても居心地が良かった。

出されたお茶の色が透明な翡翠色をしているのを心底珍しそうにしてから、美麗は落ち着きなく周りを観察している。お嬢様である彼女にとっては、ここにある物など大して珍しいものでもないだろう。

それとも、本格的な品定めか。美麗なら美術品の値段の見当が付けられる程度の鑑定眼があるだろう。そうして、相手のランク付けは行われるのだ。

「素敵ね〜！　ここが客間なら、レイモール様のお部屋はもっと素敵に違いないわ」

誰もいないのを良い事に、美麗は部屋中を歩き回っているのだが、それが建築デザインの事を言っているのか、それとも部屋に置かれた賢覧豪華な調度家具の事を言っているのか、私には判断しかねた。一度座つたら立ち上がるのが嫌になってしまいそうな、心地良いソファに腰を沈める私の傍を通り過ぎ、彼女はテラスをジッと眺めている。

「勝手に……開けるな……よ」

擦れ気味の私の声が届いたかどうかは、分からない。

だが彼女は、踵を返して、周囲に置かれた美術品の鑑定を選んだようだった。

「あまり、ベタベタ……触らない方が、いいぞ……」

「分かってるわよ」
聞こえていたのか。

うるさそうに眉間に皺を寄せる表情は、私にしか見せない顔だろう。

忠告を聞き入れたのか、触る事はしないものの、棚や机の上に置

かれた美術品をマジマジと観察しては頷いたり、考え込んだりしている。時折、関心すら見せない物は、どうせ価値が低いのだろう。

一通り鑑定し終わると、彼女はやはり テラスへと足を進めた。私が声を発する前に、扉は開かれてしまった。

「素敵な眺めね」

それと同時に流れ込んでくる冷たい風に、蜂蜜色の髪を遊ばせて、彼女はテラスへと出て行った。

まったく、人のことを散々礼儀知らずと罵りながら、自分は棚上げなのだから恐れ入る。

だが、その彼女の身勝手極まりない行動も、今回ばかりは私にとっては幸いな事だった。

なぜなら……

もてなしの為であろう部屋中に充満した薔薇の香りが、私には合わないようなのだ。とてもではないが、息をできる状態ではない。

用意された部屋に入室した途端に、否応無しに甘ったるいそれを吸い込み、吐き気をもよおしてしまったのだ。

私は、今では入手困難なほど貴重な翡翠色の緑茶を口にする余裕もなく、部屋のソファに駆け寄って座り込んだ。手で口を塞いでいなければ、意識を保っているのも苦しくなるほどだ。美麗が、窓を開け放ってくれたおかげで、外から冷たくも新鮮な空気が入ってくる。それは、私の背後から、優しくゆっくりと周囲を包んでくれているような気さえした。

私はやっと息が出来る事に安堵して、口と鼻を覆い隠していた手を下ろした。

すると、テラスから戻ってきた美麗は、今更ながらに言う。

「何よ？ 気分が悪いの？」

遅いだろ。気付くのが。

「良く平気だな。臭くないのか？」

「臭い……？ 信じられない！ バラの香りを臭いだなんて！ ……ホント女じゃないわね」

「ほつといてくれ」

女でなくても結構だ。いくら女性の嗜みたしなだからといっても、息も出来ないような鼻に付く匂いの代物など付けたくもない！

ソファから立ち上がり、新鮮な空気を求めて開け放った窓へ私が近づこうとした時、ドアがノックされた。

「レイモールです。入ってもよろしいでしょうか？」

その聞き覚えのある声に、美麗の顔は満面の笑顔を浮かべて承諾した。

「失礼します。美麗さん、ユー……ジャンヌ。ごきげんよう。ああ、そのまま結構です」

素早く駆け寄ろうとした美麗を制して、彼の方から近寄ってきた。

「本日は、急なお願いにも関わらずお越し下さってありがとうございます。心からお礼申し上げます」

レイモールは美麗の手を取り、その指に口づける。

「こちらこそ、お招きに預かり光栄ですわ。それに素敵なたらの香りですわね」

美麗の機嫌はすこぶる良い。

「お気に召して頂いた様で」

「ええ、とても。どのルームフレグランスかしら？ 差し支えなければ教えてくださいませんか？」

「これは、今度我が社で発売する予定の物なんです。今日はその完成披露パーティーなのですよ」

二人のやり取りを私は突っ立ったまま眺めていた。

まあ、そうでしたの。素敵ですわね。ぜひ拝見したいですわ」

「もちろんです。その為に御招待したのですから」

レイモールは、美麗に微笑みを返すと私に近づいてきた。

だが、私は動けなかった。

彼に見惚れていたからではない。

目の前がクラクラして地面が揺れ、その場に立っているだけで精一杯だったからだ。

「ジャンヌ。またお会いできて光栄です」

彼は手を差し出したが、私の手は動かなかった。挨拶を拒んだのではない。

動けばそのまま倒れてしまいそうだった。

「ジャンヌ。失礼よ」

美麗の視線が私に突き刺さるのを感じた。

「ジャンヌ？　どうかなさったのですか？」

なさっている！

なさっているが、それも伝えられない程血の気が引いていくのが分かった。目の前にいるのが男でなければ、素直に倒れられるものを。男に抱きとめられる自分を許せないだけに、どうにもならない。しかし、体は限界に達した様だった。

私は、不本意なままに彼の前で昏倒してしまったのだ。

第7話 薔薇の香り2

『今日は、何して遊ぼうか？ ユーナ』

若い少年は、嬉しそうに言った。

『そうね。今日はハーブ園に行きましよう？ 少し遠いけど、今ならラベンダーが咲き誇っていると思うわ。あなたは何がしたい？』
笑顔でこちらを振り向いた少女の金色の髪が、サラリと揺れる。
同時に少年もこちらを見下ろして、微笑んでいた。

私に問いかけているのか？ 私は、別にしたい事など何も無い。

それよりも、お前たちは何故、私を見下ろしているのだ。

此処は、どこだ？

周りを見渡せば、色とりどりの薔薇が咲き乱れ、情熱的な香りを惜しみなく披露していた。頭上にはガラス張りの天井が見えた。どうやら、温室のようだ。

『私』
私の口が独りでに動いた。

『ふふ。そうなの？』

オレンジ色の瞳の少女は、あやす様に私の頭を撫でる。

『そうだ、ユーナ。リースを作る事はできる？』

『できるわ』

『それなら、みんなでリース作ろう。そして自分の部屋に飾るんだ。とても良い香りがするよ』

なんだそれは。私にはそんなものなど必要ないぞ。

『良い考えね、レイ。じゃあ、行きましようか？』

刹那、少女が私の手を握り、走り出した。

ちらりと振り返れば、レイと呼ばれた少年が追いかけてくる。

『ユーナ。そんなに走ったら危ないよ』

『大丈夫よ！ それに早くしないと日が暮れてしまうわ』

見上げると、走る少女の金色の髪は、自由にたなびいていた。

「今日は、お客様がおみえになります。こちらの衣装をお召しくださいませ」

部屋の中央に置かれたテーブルには、箱から出されたばかりの新しい洋服が広げられていた。その周りには、服に合う様にと選んできたらしい小物の類が、溢れかえっている。

「ユナ様は既にお支度を整えられました。様も、お早く寝台からお降り下さいませ」

丁寧なのか投げやりなのか分からない口調で言いつけられ、私は困惑した。

確かに私の体は、ベッドに沈んでいるようだが、お前の様な、神経質そうで小うるさい使用人を雇った覚えなどないぞ。それに、その服は子供のものではないか。私に合う訳がない。

「またも、口が勝手に何かを発したようだ。更には、勝手に体が動き出す。」

驚いた事に、合うはずもないと思っていた洋服は、私以外の者には着用できないのではないかと思わせる程、ジャストサイズだった。言いたい事は山ほどあったが、私の意思に反して口は閉じたままだった。

そのまま、有無を言わずヒラヒラしたタイやキラキラしたカフスなどを着けられ、部屋を追い出された。

そこは見覚えの無い廊下。一歩足を踏み出せば、感触の良い絨毯が全ての衝撃を和らげてくれるようだった。

「何をボーっとなさっているのですか！ 皆様が客間でお待ちです」

後ろから、先ほどの使用人が怒鳴りつけてくる。

そうは言われても、見たことも無い部屋から、同じく記憶のない廊下へ押し出され、知識にない客間へ移動しろと言われても無理というものだ。

私の口は何かを紡ぎ、足が前へと進み始める。

後ろを使用者が、付かず離れず歩いていった。

見知らぬ廊下は、大人が5人並んで歩いても余裕のありそうな広さで、天井ははるか彼方に位置し、それを支える柱達が随分と大きく見えた。

私の足が立ち止まった先は、最初の部屋から5分程歩いた所にある部屋だった。

頭より高い位置にある扉の取っ手に手をかけ、私は部屋に入った。

「 ! おはよう。今日の気分はどう? 」

私の顔を見るなり駆け寄ってきた少女は、桃色のシフォンドレスを着用していた。肩に流れる金色の髪は、ふわりと柔らかさそうで思わず触れてみたくなった。

「 『

』ありがとう。私はとても調子がいいわ。今日は、とてもステキな所へ行くのよ。そして、その後で、あなたの主治医の先生が二人一緒に診てくれるそうよ。』

私は金髪の少女を見上げていた。すでに、驚きはしなかった。

私は、私ではないのだろうかと感じていたからだ。

少女に手を引かれ部屋の中央へ行くと、ソファに座らされた。

「 お父様、お母様。ありがとうございます。 と一緒に外へ

出られるなんて夢のようですわ。』

お父様、お母様と呼ばれた人物は、私の目の前に座っていたが、その表情はお世辞にも微笑んでいるとは言い難く、悲しそうに口元を歪めた。

「 ドクター・ウィストンがおみえになりました。』

目の前に座る二人の大人の顔が、緊張でこわばるのがはっきりと分かった。

全員が立ち上がると、ドクター・ウイストンなる人物が部屋に通され、その人物の顔を目の当たりにした私は驚きを隠せなかった。なぜなら、ドクター・ウイストンと呼ばれ挨拶を交わしている男は、レイモールの屋敷ですれ違った彼の曾祖父に違いなかったからだ。

歳は随分と若いようだが、それでも老人である彼の目の周りには年輪が刻まれていた。

「様、おはようございます。今日はいつもとは違う環境となりますが、お心構えは宜しいですか？」

「自分が何を言っているのか、さっぱり聞き取る事が出来ないが、喜びに心が弾んでいるだろう事だけは分かった。」

「それは、頼もしいかぎりです。それと、お二人にコレを差し上げましょう。庭の薔薇から抽出したエキスで作った香水です。たしなみとしてお持ちください」

「ありがとうございます！ドクター・ウイストン」

小さな小瓶を手のひらに載せて、少女は瞳を輝やかせていた。

「皆様、準備は宜しいようですね。それでは、参りましょうか」

レイモールの曾祖父は、手にしていた杖をカツツと床に打ち付けて全員を促した。

そして、目を覚ました私の視界に飛び込んできたのは、天井の見事な壁画が透けて見える白い布だった。

第8話 薔薇の香り3

目を覚ますと、私の視界に飛び込んできたのは、見事なまでの天井壁画が透けて見える白い布だった。

ふんわりとした感触が体全体を包み込んでいる。

……ああ、寝台に寝かされているのか。

私は、しばらく天井を見つめたまま、すっきりとしない気分を味わっていた。

何か、夢を見ていた気がするのだが……よく、思い出せない。

頭の動きが、いつもより鈍い……。

考える。回転を鈍らせてはいけない。

今、最優先で考えなければならぬ事は……此処がどこかという事と……それから……。

手の平を額に当てると、冷たく湿った感触がそこにはあった。

頭を冷やしているらしい。

その瞬間、思い出したくも無い事を、むしろ永遠に記憶の彼方に葬り去ってしまったかった事を、鮮明に思い出してしまった。

自分が男の前で倒れてしまったという、人生の汚点とも言えるべき事実。

そうだ！ 薔薇の香りに中まてられて、意識を手放したのだ。

なんたる失態か！

急に、脳内の霧が晴れたように意識がはつきりとしてきた。

この私が男の腕に抱かれるなど、恥もいところだ！

あの状況で倒れた人間を放置して置くほど、レイモールは薄情な人間ではないだろうし、紳士然とした彼ならば目の前で倒れた女性を運ぶくらいのはするだろう。

せめて、お姫様だつことというやつだけは遠慮願いたい……。

フェクトが聞いたら、何というだろうか。『ジャンヌ様も本当は女性だつたんですね』とか、『生物学的性別には、抗えないんです

ね』とか、楽しそうに言うのに違いない。

落胆の息を付くと、私は寝台から体を起こした。一瞬こめかみに痛みが走ったが、吐き気は治まっていた。

たかだか薔薇の香料を吸い込んだ程度で、この失態。情けないものだ。

部屋は、装飾だけ見れば先程と変わりが無い様に思えたが、薔薇の香りがしない点で違う部屋なのだと分かる。

「美麗は、パーティーに参加しているのか？」

ぼそりと呟くと扉が開いた。銀製の盆を手にした少女が入ってくる。

15、6歳だろうか。

彼女は、私に気付いて近づいてきた。

「お気づきになられたのですね。ご気分はいかがですか？ 宜しければお水か、果物などご用意できますが」

振り返った彼女の持つ銀製の盆には、水差しや果物の入った籠などが乗せられていた。

「いや、結構。それより私と一緒に来ていた女性を知らないか？

蜂蜜色の髪を結ってクリーム色のドレスにラベンダー色のストールをしていた、レイモールと一緒にいたはずなんだが」

「レイモール様でしたらパーティーに参加されています。どなたか女性を連れ立っているのをお見かけしましたが、お探しの女性かどうかまでは」

「そうか……」

私が納得したのを見定めると、少女は寝台の隅に落ちていた布を拾い上げた。先程まで私の額を冷やしていた物だ。彼女はそれを氷水に浸すと、水気を絞りながら言った。

「まだ、お休みになられていた方がよろしいかと思えます。レイモール様にもきつく仰せ付かっておりますので」

彼女は身を乗り出して私に横になるよう促したが、私自身は起き上がって早々にパーティー会場へ参入したい気分だった。

出来れば、屋敷内も少々うるつきたい。

裾の長い細身のドレスでは、俊敏な動きは期待できないが。

だが、気がかりなことがあると落ち着いてはられない性分なのだ。

「いや、もう……」

大丈夫と言いかけて、少女の首筋から爽やかな香りが微かに漂うのを感じた。柑橘系の匂いだろうか？

「香水？」

私の問いに彼女はハツとした様に顔を見上げ、そして素早く身じろぎした。

「申し訳ありません。香りには敏感な方だと伺っておりますのに」「いや、そういうつもりで言ったのではなくて。バラより爽やかでいい香りだなと」

私のつたない慰めに、彼女はホツとした顔を見せた。

「私の薔薇ではなくてレモンバームで作っていただいたんです」「手作り？ 香水を？」

「はい。会社で開発している試作品だとかで」

「へえ……」

そうか、佐野財閥は製薬会社から立ち上げたのだったな。

「そういえばさっきの薔薇の香りも……」

「はい。先ほどのお部屋の香りは名前を『A Maiden's Prayer』《アメイデンス プライヤー》と言いまして、商品として来月から販売される予定なのです」

乙女の祈り、か。いかにも女性受けしそうな名だ。

「香水だけでなく、御香や香蠟、化粧品に至るまでシリーズ化して順次発売される予定なんです。まずはフレグランスから……」

随分と嬉しそうに語る。販売前の商品について、そんなに情報をもらして大丈夫なのか？ まあ、たかが香水だが。

「……あ、申し訳ありません。私ったらつい、お客様に失礼な口を……」

「いあ、気にしないでくれ、情けなくも倒れた私が言うのも何だが、楽しい話題だ」

少女は、頬を染めて微笑んだ。

そう、私には強かに興味をそそる話だった。なぜなら、館に足を踏み入れた時に見かけた客の中に、先日忍び込んだヘルスファーマシーの重役らしき人物を発見したからだ。

レイモールとヘルスファーマシーの専務であるベンダーは友人なのだから、会社同士の付き合いがあってもおかしい事ではないのだが。ベンダーの姿は認識できなかった。

それとも、私たちのように別部屋に滞在しているとも考えられるか。

商品の完成披露ということは、下にいた連中はその関係者や同業者と言ったところだろう。

当然、私や美麗のような友人という無関係な輩も含まれてはいるのだろうが。

「私は関係なくはないか……」

「はい？」

「いや」

無邪気な顔で聞き返してくる彼女に、私は咄嗟に笑顔を作った。

私が、彼の友人であるベンダーの会社を探っている事など、レイモールは知らない。

彼女が差し出した冷えた布を受け取ると、私は再び寝台に横になる。

レイモールとベンダーは友人だ。

仕事上での関係はどの程度だろうか？ お互いの機密事項を共有している可能性もありうるとすれば、この屋敷内も探索の対象にしなければならぬだろう。

私は、友人だと言って笑顔を振りまくレイモールの顔を思い浮かべながら、目を閉じた。

レイモール・佐野・ウィストンとは、何者だろうか……。

第9話 依頼

いくら親友の美麗みれいに強引に連れ去られたからと言って、例え、幼き頃の学友が開催する祝いの席だからと言って、パーティーのような貴族の暇つぶしに付き合っている場合ではなかった。本来なら今は、ベンダー・フリンジ・ラパールの周辺を探るために、いつもの装備を身につけ、仕事に身を投じているはずだったのだ。

それが……、それが……

こんな場所で、余裕ブツこいて寝ているとは！

今更言ったところで、どうにもならないが。

そもそも、あいつの持つてくる仕事の依頼は、難しくはないが何か余計な事に巻き込まれる傾向が強い。それも、あいつの思惑の一部なのか、それとも不可抗力なのか。どちらにしても、面倒な事に変わりはない。

だから！ だから、あいつの仕事を請けるのは嫌だったんだ

私は、店の2階にある書齋で積み上げられた書類の束と格闘していた。何度も同じ様な文章を読み、同じサインをする。いい加減限界だった。

「ジャンヌ様。終わりましたか？」

光を透かす絹糸のようにサラサラな髪を靡かせて、不吉な物体を抱えて近づくと少年は、私の助手を務めるフェクト・S・ジェンスーだ。

「花の仕入れに行ってきました。店の方はやっておきますから、今日中にこれ、全部片付けちゃって下さいね」

「今日中!？」

拒絶を込めた叫びも虚しく、可愛らしい顔立ちの少年は「そうです」と即答した。

もはや溜息すら出ない。積み上げられた書類の山は30センチ以上もあるというのに、彼は更に私を追い込むかの様に言ったのだ。

「サンダーソニアが届いていました」

そう言っつて、不吉な物体 - サンダーソニアを1輪、置いた。

机の隅にあるそれをチラリと見やると、【ジャンヌに贈る】というメッセージカードが添えられている。私は今度こそ溜息をついた。

それは、裏稼業の仕事依頼を意味していたからだ。

「キャンセル」

「できません!」

早いじゃないか……まだ、言い切っていないというのに……。

分かっつてはいても、言いたくなくなってしまふのだ……いい加減、開放してくれと。

私は渋々聞いた。

「……どこからだ？」

「CSIです」

「何……だと? まさか、また奴じゃあないだろうな」

「はい。そのまさかです」

私は、頭を抱えたくなった。

「却下だ、却下!」

「ですがジャンヌ様……」

「突き返せ! 他の仕事が詰まってるとか、何とか言っつて誤魔化せ! どうせまたろくでもない事に巻き込まれるのがオチだ」

「しかし……」

「しかし何だ?」

怒号と共に顔を上げると、そこには見覚えのある人物が満面な笑みを浮かべて立っつていた。

「既にいらっつしゃってます」

フェクトは淡々と言い、その言葉をきっかけに入口に立っていた男は書斎へと足を踏み入れた。

「やあ！ ジャンヌ。元気だったかい？ 会いたかったよ」

くるりとカールしたクセのある金色の髪、アーモンド形の大きな空色の瞳、私より頭一つ高い身長と優雅な身のこなしに饒舌じょうぜつな口。どれも、私を不快にさせるには十分な代物を持つ男。

ロイ・スプレNDER・ガーディナル。

「何しに来た」

「これは、ご挨拶だね。君に逢いに来たに決まってるじゃないか」

「帰れ！」

「冷たいなあ。僕と君の仲だろう」

「どんな仲だ！」

男は図々しくもフェクトに紅茶を注文し、勝手に客間のソファへと腰を下ろした。

「ああ、僕の事なら気にしないで。仕事が終わるまでゆっくり待つつもりだから」

その言葉どおり、奴は夕陽が空を紅く染めても、月明かりが暗闇を照らし始めても、動く気配を見せなかった。

このまま書斎の窓から逃げてやろうか。

だが、そう考えたのは一瞬のことだった。どうせ次の日も、その次の日も、性懲りしやうちりることなく、仮面の様な笑顔を貼り付けて通ってくるのが想像出来てしまったからだ。

書類を退治した私は、重い足取りで客間へと向かった。

そこには楽しそうに夕食の準備をするフェクトと、もはや客といふより主人であるが如く振舞う金髪の男が座くわっていた。

第10話 依頼2

「つまり、私に盗んで来いと？」

ソファに座り悠長に食後の茶を啜る男を、私は睨み付けた。

「フェクト、紅茶の入れ方が上達したのではないかい？ 色も香りも申し分ない。とても美味しいよ」

「本当ですか！」

男がカップに口をつける様子を伺っていたフェクトは、心底嬉しそうに目を細めた。男もフェクトに笑顔を返す。

「出来ないかい？」

カップを置いた男が鋭い眼差しで私を見た。

「そういう問題ではない」

「では、やってくれるね？」

「ロイ！」

どれだけ睨み返しても空色の瞳を持つ男、ロイ・スプレンドー・ガーディナルはその余裕の色を崩さない。それでも、私にも引き下がれない理由というものがあつた。

「私の専門は民間人ではないんだ。何度言えば分かる？」

「犯罪を犯した者は、既に普通の民間人ではないよ」

「だが、法で裁けるだろう」

「証拠があればね」

私は返答に詰まった。確かに証拠が揃わなければ逮捕できず、裁判に掛ける事も不可能だ。

ロイは続けた。

「上層部から捜査停止を言い渡された。つまり」

「圧力が掛かった」

私が言葉を繋ぐと、ロイは眉をひそめて頷いた。

ソファにもたれた私は大きく息を吐き、天井を仰いだ。

ロイが所属するのは、警察でも特別な権限のある部署だった。緊

急時には実力行使も許されている。だが、それでも停止命令が出たとなれば、相手はそれだけの権力、地位を持った輩という事だ。最悪の場合を想像して、裏で蠢いているのが厄介な影だったとしても、私が手を出すのは躊躇われる。それに何より、警察の手助けなどしたくはない。私は警察とは逆の立場にいる人間だ。そもそも、ロイが私に事件捜査の協力を要請すること自体が間違っているのだ。

「僕は、君の事を敵とは認識していないよ。余計な干渉をするつもりもない」

既に干渉しているではないか。それに、私の心を読んだかの様なこの発言。それが一番気に食わないのだ。お前の目の前にいるのは、法を犯した犯罪者なんだぞ。捕まえにきた、と言われる方がまだマシというものだ。

「僕に君は捕まえられない。法を犯したという証拠がないからね。

それに、前回の事も今回の事も取引だ。君が犯罪者だというのなら僕も同罪だな。実刑は免れないとして……死罪だろうか？」

涼しい顔をしていけしゃあしゃあと！

なぜ、あの時こいつの記憶を消すのに躊躇ってしまったのだろう。後悔先に立たずとは正にこのことを言うのだ。

「借りはあるがな……」

私の小さな呟きと溜息を、ロイは勝手に返事として受け取ったようだった。

「やってくれるんだね。ありがとう」

ついに観念させられた私は、話をさつさと切り上げる為に、素早くロイに向き直って依頼内容の詳細を尋ねた。

「具体的に何が欲しい？」

「現物が手に入ればそれに越した事はないけど、製造現場や取引現場の写真、奴らが関わっていると確認できる何か、かな。まあ、当然セキュリティは厳重だ。僕の持っている情報は全て提供するが役に立つ物かどうかは分からない。接触方法は任せるが、僕の方でも出来る限り準備はしておくよ。いつでも動けるようにしておいて

くれ」

「分かった。……だが、本当にいいのか？」

私の問いかけにロイは答えなかった。

「さて、用も済んだことだし本題に入ろうかな？」

「は？」

「ジャンヌ。僕とデートしないかい？」

そう言って彼はサンダーソニアを1輪差し出し、深紅のリボンに包まれた白い箱をテーブルの上に置いた。

私は開いた口が塞がらなかった。出し抜けに何を言い出すかと思えば。

「満足させられると思うんだけどな。僕なら」

そう言ってニヤリと笑った奴の顔に怒りを覚え、湧き上がる激憤を拳に籠め解き放った。

第11話 葡萄の記憶

周囲に人の気配を感じて目を覚ました。美麗とレイモール、私を看病してくれた少女の声がしていた。

「はい。大分良くなつていらつしやいます」

「そうか。それは良かった」

「せっかくパーティーに招待して頂いたのに、突然倒れるなんて不行儀な人だわ」

親友を労わるという事を知らんのか。おのれは。

「いや。こちらの配慮不足だったよ。体質的に受付けられない人もいる事を失念していた」

「レイモール様は悪くありませんわ。あんなに素敵な演出をして下さったのに、その恩恵を拒絶するなんて」

「女じゃなくて悪かったな」

上半身をベッドから起こすと、私は履き捨てる様に会話に割って入った。

「ジャンヌ！」

真つ先に駆け寄ってきたのはレイモールだった。

「気分はどうだい？」

「大丈夫だ。それより、出席できなくてすまなかつた」

「気にしなくていいんだ。大したパーティーじゃない」

彼は、相変わらず優しい笑顔を私に向けた。何故か、その笑顔が私の心には痛かつた。

「ジャンヌ様、何かお口になさいますか？」

レモンバームの香りの少女だった。

「あ、いや……」

「そうだね。何か食べた方が良い。バレイスリイ、果物を」

レイモールに指示されると、バレイスリイと呼ばれた少女は用意してあつた果物を切り分け始めた。

「パーティーは終わったのか？」

「まだやってるわ」

不機嫌そうに答えたのは美麗だった。その顔には、私のせいで『パーティーを途中退席させられた事への怒り』が滲み出ていた。

「君がよければ夕食を一緒にどうか。僕は、昔の友人に会えてとても嬉しいんだ。もう少し一緒に……ゆっくり話したいんだけど」
「またも私の胸がズキリと痛んだ。彼は笑顔を浮かべているのに、どこか悲しげだ。」

だが、今夜はロイに依頼された仕事がある。どうしても帰らなくてはならない。私の胸が痛むのはそのせいだろうか。それとも、私も彼と一緒にいたいのだろうか？

まさか、私にそんな感傷的な心がある筈もない。

「レイモール……せつかくだが……」

「素敵ですわね、ジャンヌ。パーティーを欠席したんですもの、夕食のお誘いまで断るなんて失礼極まりないですわ」

美麗の言葉には明らかに棘があった。自分が誘われないという事実への嫌味も追加してだ。

「もちろん美麗さんも一緒にどうぞ。お二人の思い出話などお聞きしたいですね」

「嬉しいですわ。レイモール様。ぜひ御一緒させて下さい」

美麗が勝手に話を進めるおかげで、断るタイミングを逸してしまった。

使用人のバレイスリイが、銀製の盆をレイモールに差し出した。

「ありがとう。……折角だけど、桃は下げてくれるかい？ バレイスリイ」

少女が用意した盆の中から桃の入った銀皿を排除すると、彼はそれを私の前に置いた。

「君は葡萄が大好きだったね。確か一番はロザリオで次がマスカット。次は……」

レイモールは嬉しそうに皿に盛られた葡萄を選び分けている。葡

萄の話などした事があつただろうか。何しろ10歳の頃の友人だ。記憶はないに等しい。

「レイモール、自分で食べれるよ」

苦笑して言うと、彼は心底残念そうな顔を見せた。

そんな顔をされても困る。

「ところで、今日は香水の完成披露だったのだろうか？」

「そうだよ。ぜひ君にも見せて上げたかった」

気まずい思いで話題を変えると、レイモールはまた、いつもの笑顔になった。

「公式披露なのか？」

「いや、それはまだ。正式発表は来週なんだ」

彼の表情は相変わらずの微笑みに満たされていて、動揺による変化は見られなかった。

何も疚しいところは無いように見えるのだが。

ロイの様に笑顔で本音を隠す輩は、そのしたたかさ故に暴くのが難しい。どうやって、探りをいれようか。

「そうか、それは出席できなくて残念だったな」

私は、気のない返事をした。

第12話 葡萄の記憶2

既に、外は闇に包まれていた。その静けさは何処からともなく恐怖を連れてくる。

私達は、結局夕食をとらずにレイモールの屋敷を後にしていた。今は、馬車に揺られ帰路につくところだ。

美麗は、ずっと肩を落としたままだった。

「仕方ないだろう。レイモールがあれでは」

「分かっているわよ。……ああ、そうだわ。今度お見舞いに伺えばいいんだわ」

胸の辺りで両手を合わせた美麗は、笑顔で言う。切り替えが早いというか、前向きというか、羨ましい性格だ。

私は、息をつくとレイモールの事を思い返した。

私の体調を確認しに来た後、主催者としての役割を果たす為に、彼は再び会場へと戻っていった。美麗にパーティー中の彼の様子を聞いてみたが、ずっと一緒だった訳ではなく、彼は客人の対応に追われていたのだという。それだけ聞けば怪しむところは何もない。ただの商品完成披露会だ。

だが、裏取引をしないという確証もない。そんな人柄には見えないが、人間、外見だけでは判断がつかないのも事実だ。

パーティー終了後、私達の待つ食堂に現れたレイモールは、額に異様な程の汗をかいていた。血の気の引いた顔で席に着いた彼を見て、疲れているのだろうとは思ったが、レイモールは間もなく意識を失った。

一緒に会食をすること 正確には気に入られる事 を楽しみ
にしていた美麗は、レイモールの看病をする、と理由をつけて帰りがたがらなかつたが丁重じやうじゆうに断られた。平たく言えば、屋敷の住人に追い出されたのだが。使用人達に解放される彼を見送って、私達は今ここにいたのだった。

「綺麗よね、コレ」

瞳を潤ませる美麗の手の平に乗せられているのは、帰り際に記念品だと言って渡された香水瓶。中には使用人のバレイスリイが自慢していた、A Maiden's Prayerが入っているらしい。蓋はワインレッドで、ボトルはワインレッドから淡い桃色へのグラデーションになっていた。他の客が同じものをもらっているかどうかは知らないが、レイモールからだと言われた。

添えられたカードには、『愛しいユーナへ』と書かれている。

あまり、実感の沸かない呼び名だ。

レイモールが言う様な彼との思い出は、私には覚えがなかった。再会したあの夜にも同じことを言っていたが、私が覚えているのはそういう名前の学友がいたかもしれないという事だけだった。私が彼の話に曖昧な返事をする度に、レイモールは酷く悲哀ひあいに満ちた顔をする。

出来れば思い出してあげたい気もするが。

いや、何を考えているのだ。私らしくもない。一時の感情に流されるなどあつてはならない事だ。思い出せないのなら、それは必要のない記憶なのだ。

小さなバッグの中に納まったそれは、私自身には必要のないもの。思い出など、人生の足かせにしかならない。

感傷など不必要だ。

倒れた彼には悪いが、今夜の仕事を延期せずに済んで良かったのだ。もちろん、ロイの為ではない。依頼をこなすのは私の義務だ。

仕事での障害と成り得る対象物への思い入れなど、あつてはならない事なのだ。

「それにしても、その貢物みつもの、変わってるわね。女としてみられないのね、やっぱり」

美麗がどこか勝ち誇ったような視線を移すのは、私の隣に置いてある大量の葡萄が入れられた大きな籐籠だ。ロザリオピアノ、ブラックオリンピア、どこから入手したのか紫苑しおんまで。多種に亘った

葡萄が入れられている。

レイモールは、私が葡萄を好きなのだと認識している。確かに葡萄から造られたワインは好物なのだが。それとも幼い頃、私が彼にそう言ったのだろうか。いや、そうなのだろう。でなければこの現状の意味が説明できない。当の私は、その記憶を掘り起こす事が出来てはいないのだが。

「そんなに葡萄が好きだったなんて、知らなかったわ」

嫌味のような言い草の美麗に、私は呟いた。

「私もだ」

ふと見た窓の外には、何も映らない黒い世界が広がっていた。

第13話 追加依頼

「それは既に手に入れているよ」

白いティーカップを手に、ロイはさらりと言った。

「何処で？」

いつの間に?! と、驚きを隠せなかった私は、慌てて平静を装った。

「セレクトティアだよ」

私の態度に気付かない振りをしているのか、ロイの口調は変わらなかった。

「そうか……」

彼が言うセレクトティアとは、この町で1、2を争う大型のショッピングモールのことで、ブランド店ばかりが軒を連ねている、私のような庶民には縁のない場所だった。

「店で普通に売られていたよ。念の為、成分を調べさせたけど普通にバラの香水のようだ。残念な事にね」

テーブルに置かれた小さな香水瓶を見やり、私は溜息をついた。

レイモール主催のパーティーで帰り際に渡された香水は、もしか

……と思っただけだ。杞憂きゆうだったようだ。

「どうして、その香水が怪しいと思っただけ？ ああ、いや。闇雲にデータを集められても困るからね。もちろん君のことは信用しているよ。ただ、念のために君の意見を聞いておきたいと思っただけ」

ロイは、相変わらずの笑顔で言った。何でもない笑顔の筈だが、つい警戒してしまうのは私のクセなのかな。それとも、この男の存在の曖昧さゆえなのだろうか。

「……パーティーには、ヘルスファーマシーの重役達が来ていた。……と言っても顔を見た程度だが。それに、専務であるベンダーとレイモールとは親友らしい。ただの企業交流だけには留まらないかもしれないと……考えた……」

らしくない言い回しだった。いつもなら断定しているところなのに、何故か尻すぼみになる。

「理由はそれだけ？」

「何？」

「いや……なるほど」

意味あり気に目を伏せると、ロイは冷め切っているであろう紅茶に口をつけた。

「彼……レイモール・佐野・ウイストンとベンダー・フリンジ・ラパールは、父親同士が親友だった。だった、っていうのは、ウイストンの父親は既に他界しているからだけど。幼い頃、ベンダーの病気をウイストン家が治したという話だよ」

「父親が……？」

親の代からの付き合いで、ベンダーはウイストン家に借りがある、という事か。

「それで？ まさか、提供できる情報が小瓶1本だけではないのだろうか？ 君ともあるう者が」

「?!」

何だどつ！ と叫ぶつもりで顔を上げると、またも嘘臭い満面の笑顔を返されて、喉に何かが痞えたようになる。

かわりに、挑発的な笑みを浮かべる目の前の男に一瞥を投げつけて、用意しておいた3cm四方のデータディスクをテーブルの上に投げ出した。

それにしてもこの男は、どうしてこうも態度がでかいのだ？

「お望み通り忍び込んでやったよ。ヘルスファーマシーの本社ビルと工場だ。工場の方にあった実験用の現物は持ってきていないぞ。原型が何なのか考えたくもないようなホルマリン漬けがゴロゴロしていた。人間の所業とは思えない代物だった。本社の方は、研究から経営までのすべてのデータをとりあえず拝借してきたが」

「ありがとう。ジャンヌ」

素直に礼を言われ、背中から首筋にかけて妙な悪寒が走った。そ

れに何とか耐えた私は、ロイが手を伸ばそうとしていたディスクを手で覆った。

「ジャンヌ……？」

「ロイ、お前が狙っているのはベンダーという男か？ それとも……」

澄んだ空色の瞳から笑みが消えた。

「余計な詮索せんさくはしない……それが君のスタイルではなかったかな？

それとも、彼に興味がある？ レイモール・佐野・ウイストンに「な？！ 私が他人に興味を持つなど有るわけがない！」

断固否定してから、慌てて手を引つ込める。

私は何を聞こうとしていたのだろうか？ ロイが、警察が何を捜査していようと関係のない事だ。私の仕事は、依頼をこなす事だけなのだから。

「ああ、そうそう。これは最近入手したばかりのフレッシュな情報だけど。ウイストン家は、レイモールと曾祖父の2人以外は亡くなっているんだ。その死因は全て脳死とされているらしいんだよ。不思議だねえ、家族がみな揃って同じ死因。いや、仲が良いと言うべきなのかな？」

ロイは、くすりと口元で笑う。君には興味のない事だったね、と付け加えて。

その言葉は、私に後悔を味わわせるには十分すぎる程の内容だった。やはり、こいつに隙を見せるべきではないと、改めて実感させられる。

「……欲しいのか？」

「……何を？」

何を？ この男は！ ほんの数秒前にレイモールとベンダーの情報を口にしたのは何の為だ！？ 私のけしかける為ではないのか？

「だから……ウイストン家の情報を、だ……」

自分の口から出ている声にもかかわらず、まるで再生された音声を聞いているかのようにだった。誰かに喋らされている……そんな気

になって、自分の言葉を脳内で反芻はんそうしていた。

「その質問への答えは……警察官としては肯定だね。僕個人としては」

「なら、依頼しろっ！ 回りくどいことはするな。私に言えばすむ事だ。いつものように凶々しい態度で、『調べて欲しい』と言えっ」

ワザとらしく遠まわしな言い方をするロイに、苛立ちを隠せなかった。

私が、ほんの少し見せた隙を、ロイ・スプレNDER・ガーディナルという男は見逃さなかった。私の学友だというレイモールの名に、私らしからぬ反応を示した事を。

だが、それなのに、分かっている、知らなかった振りをする。必要な駆け引きだと言われれば、閉口するしかないが、どうにもヤツの考えが読めなくてイライラするのだ。

「………分かったよ。では、正式に依頼を追加するよ。ウィストン家を調査してくれるかい？ ただし、友人として私情を挟みたくなったらいつでも手を引いてくれて構わない。それでも、成功報酬として依頼料は払おう」

「冗談じゃない。私のプライドを汚けがす気か？」

ロイは、呆れたように息をついた。

「そうだね。では、君に任せるよ」

「………ああ」

正式な依頼でレイモールを調査する。とはいえ、どこかすつきりしない気分だった。

「ところで、ジャンヌ？」

「何だ？」

「凶々しい態度だなんて、ヒドいなあ。僕はいつでも礼儀正しく、謙虚に振舞っているつもりなんだけど？」

「あ？」

まさか、無自覚……いや、無意識なのか?! 人を上から見下ろ

したようなあの言い草は！

「お前、どの面下げて」

「失礼します。あのぉ、そろそろお夕食の時間なんですけど……」

おずおずと扉から顔を覗かせたのは、気まずそうな顔をしたフェクトだった。

「お仕事中に申し訳ありません。何度もノックしたのですが、話し込んでいるご様子でしたので……ですが、さすがにお食事をされないのでどうかと思ひまして」

「あ、ああ。悪かった、フェ」

「それは悪い事をしてしまったね、フェクト。いや、仕事の話は終わったよ。君に余計な気遣いをさせてしまうなんて、僕も未熟だなそれで……僕も呼ばれていいのかな？」

私の言葉を遮ったロイは、フェクトに謝罪しながら、チラリと私の顔を伺った。

「……好きにすればいいだろう？ 何故私に了承を得ようとする？」

夕食を作ったのはフェクトだ。フェクトに聞けばいいだろう……

……それに、せっかく作ってくれた料理を無駄には出来ないからな
言いながら、込み上げてくる恥ずかしさを抑えていたが、誰の返事も返つてこない事を怪訝に思い、俯いていた顔を上げる。

すると、男二人がムカツクほど頬を緩ませた笑顔で、私の顔をマジマジと見ていた事に、私は再び苛立つこととなった。

第14話 香りに込める願い

淡い灰色の靄^{かすみ}が僕の体を包んでいた。それは、自分の命の灯火が短い事を伝えているのだろう。どれくらいもつかも分からない。このまま、ベッドから二度と起き上がれる事無く、天上へ連れて行かれるかもしれない。

明日か、明後日か。

僕には時間がない。それだけは、確かだった。

だが、全能なる神は、僕の最後の願いを聞き届けて下さったのだ。だから、最後まで望みを捨てるつもりはない。せめてこの想いを伝えるまでは。

彼女は、まだ思い出せないでいるようだけど。

「レイモール？ 調子はどうだ？」

顔を横に向ければ、声の主は、ジャンヌと出会うきっかけを作ってくれたベンダーだった。

「申し訳ありません、レイモール様。お加減がよろしくないとお伝えしたのですが……」

僕はゆっくりと寝台に横たえた上半身を起こした。

「ああ……構わないよ」

中央のソファに腰をかけたベンダーは、バレイスリイがじろりと一瞥を投げかけるのも意に介さず話し始めた。

「パーティーは盛況で良かったじゃないか。どうせ、最近の無理が祟ったんだろ？ そんなに根を詰めると、本当に死ぬぜ？」

「はは……そうだね」

僕は、力なく笑った。

「そんなに、大事なことがねえ……」

「僕にとっては、何より大事だよ。ベンダー」

「はいはい。分かってますよ」

呆れた顔で答えると、ベンダーは寝台の側へと近づいてきた。同

時にバレイスリイに席を外すよう、僕は指示を出した。

「お前が欲しがってたモノを、持ってきてやったぜ。これ以上は、もう俺でも手に入らない。先月、何者かに本社と工場に忍び込まれたらしくてね。警備員が全員朝まで眠りこけているのを社員が見つけたんだ。間抜けな話だろ？ それ以来セキュリティが更に厳重になった。親父は、実の息子の俺ですら信用してないって寸法さ」
肩をすくめたベンダーは、小さなケースに入ったチップを差し出した。

「十分だよ。ありがとう」

「そんなデータで、どんな香水を作るつもりなんだ？」

「秘密だよ」

「まあ、俺には興味がないからいいけどな。それで、交換条件だけど……本気なのか？」

「本気さ」

僕は即答した。

「……そうか。俺は構わないんだが。一応、言質をとっておかないとな。お前の事は信用しているが、最後の最後でひっくり返されたら面倒だからな」

「ああ。そうだね」

僕は手の平に収められた、小さなデータチップをまじまじと眺めていた。

「それにしても、分からないな。そんなに好きならさっさと伝えてしまえば済むことじゃないか。何もそんな周りくどいことしなくても」

「彼女は、覚えていないんだ。僕との……大事な思い出を」

「……ふーん。それって、思い出す必要あるのか？」

ベンダーは、部屋の片隅においてある女神像を興味なさげに鑑賞している。

「僕には、必要なことなんだ」

「……まあ、人それぞれだしな。だったら、その頃と同じ状況の……」

…何かきつかけのようなものがあれば思い出しやすいんじゃないか？ よく有るだろ、喉まで出掛かってるのにつてヤツ。忘れてるだけなんだろう？」

ベンダーの言葉に、僕は脳に雷を打たれたような衝撃を受けた。

なぜ、今まで気が付かなかったんだ。そうだ、思い出せないなら、思い出せるようにすればいいだけの事だ。簡単なことだったんだ。

「そうかつ……そうだよ。ありがとうベンダー」

「あ、ああ。いや、礼を言われる程じゃないさ。上手くいくといいな」

用事を済ませると、また来ると言って部屋を後にするベンダーを、僕は何か吹っ切れたような面持ちで見送った。

第15話 香りに込める願い

ベンダーから貰ったデータを、全て目を通すのに半日以上時間を要した。膨大な量だったのはいうまでもないが、そこに収められていた内容に愕然とし、平静を保ちながらの作業に手間取ってしまったのだ。

「レイモール様？」

遠慮がちに声をかけるのは、世話役のバレイスリイだ。

「レイモール様、もう御止めになって下さいませ。お体がこんなにボロボロではありませんか。どうか、どうか。これ以上は……」

泣きそうな声で、彼女は懇願してくる。

「ごめん。それは聞き入れられないんだ。それに、どうせ助からないからね」

「その様な事……」

彼女は、僕の冷たい手を握りしめ嗚咽をかみ殺していた。

自分の研究室にこもっていた僕は、寝食もそこに実験に没頭している。ここ数日は、倒れて発見され目が覚めたら寝台に横になっている、という事が珍しくはなくなっていた。

「もうすぐ完成するんだ。もう少し、後、もう少しだから」

呪文のように呟く。

自室の寝台に横になった僕の体は、鉛のように重たい。

「レイモール様。私は、あなた様にお使い出来たことを心より誇りに思っております。ですから、これからもずっとお側にいさせてくださいませ」

僕は寝台から身体を起こした。見つめた彼女の瞳には、涙が浮かんでいた。

「ありがとう。バレイスリイ、君には感謝しているよ。こんな僕を支えてくれて、こんな家に仕えてくれて。とても感謝している。…だから、あんな事はもう二度としないと誓ってくれないか？」

バレイスリイは眼を見開いた後、肩を震えさせた。

「パーティーの日に、彼女達の部屋に薔薇の香を焚いたのは君だね？　しかも、あれは……」

「も、申し訳ありません。出すぎた真似を致しました！」

バレイスリイは両手両膝を突いて、頭を絨毯に擦り付ける。

「いや、いいんだ。僕の為にも思ったのだろう？」

「……………いえ……………」

顔を伏せたまま、彼女は消え入りそうな声で返事をした。

「彼女は、僕にとって大切な人なんだ。だからもし、もし君が考えているようにジャンヌが僕の敵になったのだとしても、手出しは無用だよ」

あの日、ジャンヌ達の部屋に焚かれた香には、微量ながら有毒物質が混ぜられていた。僕のように、幼い頃から毒になれた体でなければ体調を即座に崩すしてしまう程度の毒。死に至る事はなくても、数日間は何も動けなくなってしまう可能性のあるものだった。

「レイモール様……………しかし、私は……………ローガンティア様に申し付けられているのでございます。あなた様を、何があってもお守りするようにと」

僕は、胃液が沸騰するのを感じた。

「ひいお祖父様が心配しているのは僕ではなくて、僕の体だよ。バレイスリイ」

「いいえ、いいえ。決してその様な事は。ローガンティア様は、レイモール様を愛していらつしゃいます」

「そんなはずはない！」

思わず叫んでいた。ビクリと体を強張らせるバレイスリイを目の前にしても、それは止まらなかった。

「だったら何故、こんな真似を続けるんだ！　あいつが、お母様もお父様も殺した！　バレイスリイだって被害者も同然なんだ！　いつまでもあいつの言いなりになる事はない！　こんな、こんな……………うっ、っ」

「レイモール様！」

少し興奮し過ぎてしまった。慌てて口元を押さえた僕の手は赤く染まり、ベッドにはその雫が滴り落ちて丸いシミになった。

「無理をなさってはいけません。お薬をお飲みになって下さい」

丁寧に介護をしてくれるバレイスリイに宿められ、僕はようやく横になった。目を閉じると、瞼の裏には愛する彼女の姿が浮かんでいた。

幼き日に出会った天使のような少女。今でもはつきりと思い出す事が出来るオレンジ色の瞳。

死と隣り合わせにあった状況下で、彼女は僕に希望と安らぎを与えてくれた人。

もうすぐ僕の命は消えてしまう。その前に、どうしてもやらなければならぬ事がある。

その為に、残りの時間を全て使い切ってしまったとしても後悔はしない。

早く、あれを完成させなければ。そして、全てを終わらせる。

今日は、前日の徹夜の為に、昼間の時間を殆ど睡眠に費やしてしまった。一眠りしたら、また研究室に戻る事を決意して、僕は、そのまま眠りについた。

第15話 香りに込める願い（後書き）

次話の更新は、5月24日以降となります。申し訳ありません（- ; ; | | - ; ;）

第16話 依頼の遂行

『心から君を信頼しているよ』

そう呟くと、太陽のような笑顔を残して、ロイは帰っていった。奴が気障めんどくさいな台詞を吐くのはいつもの事なのに、返す言葉が咄嗟に出てこなかったのは、どうしてだ。勝手にしろ、と吐き捨てるのがやっとだった。お前の信頼など猫の餌にもならん！ と付き返してやれば良かったのだ。

ソファにもたれた私は、天井を仰ぎ見ながら左腕を額に押し当てた。頭痛がするわけではないのに、痛い気がするのには、何故だ。

私は、天井に向かって溜息を吐き出した。

「ジャン又様、装備品の整備が終わりましたけど、点検しますか？ ジャン又様？ お疲れですか？」

リビングで休んでいた私を見つけ、フェクトが声をかけてきた。仕事で使用する道具の制作や手入れは、フェクトに任せているのだ。「いや、ぼつっとしていただけ。大丈夫だ。点検するから持ってきてくれ あ、いや、やはり自分で見に行く」

沈んだ空気を断ち切るように、ソファから体を起した。

「無理なさらなくても、僕が持つてきますよ」

立ち上がった私に向かって、フェクトが心配そうに眉根を寄せている。

「いいんだ。気分転換でもしたいところだったしな」

ソファにかけてあった上衣を羽織ると、寝室と隣接している書斎を後にした。

フェクトと並んで歩く廊下には、年代ものの赤い絨毯じゅうたんが敷かれている。老朽化が進んでいる割には、衝撃を吸収するだけの機能は衰えてはいない。

私が住居としている古い屋敷は、経営する花屋のある場所から8マイルは離れていた。徒歩で行き来するには離れすぎた距離だが、

自転車という旧時代の乗り物を使うと、片道1時間ほどに短縮される。その分、体力の消耗は激しいが。

「ジャン又様、この依頼受けて良かったんですか？」

「な……に？」

1階への階段を下りていると、半歩後ろからフェクトが唐突に尋ねてきた。

「すみません。立ち聞きしたわけじゃないんですが、昨日の話、聞こえてしまって……それで、思ったんです。ロイ様は、本当は、この依頼をジャン又様に断って欲しかったんじゃないかって。レイモール様がジャン又様のご友人だから。あの、ジャン又様の事を思っで……で、すぎた事を言ってますね。すみません」

立ち止まったまま、フェクトの話を聞いていた。

何も反論しない私を怪訝けげんに思ったのか、それとも激怒していると思ったのか、フェクトは薄い灰色の瞳を伏せた。

「……いくぞ」

「はい……」

私が再び歩き出すと、今度は黙って付いてきた。

フェクトは、ロイに憧れている。私にとっては嫌味な男でも、見る者が違えば魅力的な紳士に映るらしい。

フェクトは、ロイの弁護をしたいのか。別に、奴と喧嘩をする事など日常茶飯事なのだから、気にする必要などないのだが。

まさか、ロイが傷ついたとでも思っているのだろうか。それとも、本気でこの依頼を断れば良かったと思っっているのか。

それが、私の為だと？

1階のフロアに降り立った私とフェクトは、右手側の扉を開ける。部屋には、複雑に織り込まれた絨毯と象牙色ぞうげいろのソファが中央に配され、壁にはレンガ造りの暖炉だんろが設置されている。奥に繋がった食堂からは、昼食の準備をしているであろう匂いが漂ってきていた。

私たちは、そのまま食堂へと進むと、皿を並べていた男、ルーベンスの小脇を通り厨房へと入る。厨房で昼食用のスープを取り分け

ていた給仕係のミジヨテールが、不遜な視線を投げかけていたのを無視して、冷蔵庫の裏に隠された扉の中へと足を踏み入れた。

石造りの壁と階段が地下へと続く。

先に入ったフェクトが、入口に掛けてあつた蠟燭ろうそくを手に進んだ。

足元は暗く、慣れているからこそ歩ける構造だ。カーブした階段をしばらく下ると、着きました、と言つてフェクトが蠟燭を近くの壁に取り付けた。それを合図に、地下室全体が白い光で満たされる。

「相変わらず、この明かりは青白いな。しかも、かび臭い」

敷地の半分もの広さがある地下室は、空調設備があるとはいえ新鮮な空気は入つてこない。

「仕方ありませんよ、自家発電ですし。でも、かびは生えてません。温度と湿度の管理は万全です」

自慢げに胸を張るフェクトは、たくさんたくさんの機材とコンピュータをすり抜けて、黒いアタツシケースアタツシケースを作業台に乗せた。

「手袋とりボルバー、それにコンタクトレンズと指輪が……」
ケースを開いて、私は中身を確認する。

「普通の屋敷に忍び込むだけなので、たとえセキュリティがあつたとしても、殺傷能力のある武器は必要ないと思ひました」

「ああ、それでいい。見つければ逃げてくれればいいだけの事だ。そんなへまはしないがな」

私は、リボルバーを手に取つた。旧世代の銃器、チーフスという愛称の拳銃らしい。銀色の銃身に黒光りした銃把グリッブ、緩やかなJ字のストロークが気に入っている。

「ジャンヌ様」

「なんだ？」

「どうしてもリボルバーがいいんですか？ 僕はオートマチックの方が便利だと思つんですが」

「あんなまっ平らなフォルムのどこがいいんだ！」

「見た目とかじゃくて。連射も楽ですし、照準もぶれ難いですし。なにより弾がたくさん入ります。これ、6発しかは入らないんです」

よ？」

「無駄弾を撃たなくて済むじゃないか」

フェクトが呆れたように肩を落とした。

確かに、弾丸が6発しか入らないのは、不便といえば不便だ。しかし、殺傷能力のある弾丸を込める訳ではないから、これで十分だと思っっている。この拳銃に込めるのは、記憶を消去する為の特殊弾。私が銀色の銃身に見惚れていると、フェクトがそれから、と続けた。

「新しくホログラム精製装置を作ってみました」

そう言っつて、作業代に新たに取り出したのは、黒いエナメル製のブーツだ。

「ホログラムを？ 靴で？」

「はい。踵の内部にスイッチを取り付けてあります。使う時は踵のカバーを取り外して下さいね。その状態で踏めば周囲の情景を読み込んで、ホログラムを精製出来るようになっていきます」

「便利じゃないか。履いて使えば、自分の身を隠せるというわけか」
「はい。でも……」

言いながらブーツの踵を外すと、スイッチを押した。

「周囲の情報を検知して、入力してから、出力するので、スイッチを押してから精製されるまでに1秒程のタイムラグが発生します。それに、静止していないと使えないのが欠点です」

1秒か……。

「それでも、便利な事に変わりはない。いつでも身を隠せる場所が確保できるのは、有難いからな」

フェクトからブーツを受け取り、足を通した。

履き心地も悪くない。装置というわりには、柔軟性もあり、普通のブーツと代わり映えしないようだった。

「フェクト。明日の夜だ」

振り向き様、薄灰色の瞳を見据えて言った。

「はい。では、薬もいつものように準備しておきます」

「頼む」

額くフェクトをその場に残し、私は階段へと向かった。

ランチを待ちくたびれて、渋い顔をしたルーベンスとミジヨテールが待っているであろう地上へと戻るための階段へ。

第17話 依頼の遂行2

私は食堂にいた。

無駄に長い20人掛けのテーブルに、フェクトと向かい合わせで座って夕食をとっていた。アイロンを掛けたであろうパリッとした白いクロスの上に、瑞々しいサラダとパン、ミジヨテールの得意なミルクスープが並べられている。

食事の邪魔にならないよう、蝋燭は脇に寄せられ揺らめいていた。「フェクト、見取り図の準備はできているか？」

「ふやい？」

口にスープ用のスプーンを銜えたままで、フェクトは顔をあげた。「できたら、今夜のうちに確認をしておきたい。後で書斎に持ってきてくれ。ああ、それとロイから預かった資料もだ」

「いいですけど、指輪のチェックも一緒にしますか？ データだけなら書斎の端末に送信しておきますが」

「そうしてくれ」

軽く頷いたフェクトは、大した事ないともいうように、再びスプーンをすすり始めた。

レイモールの屋敷に忍び込むのは、明日の夜。夜にするのは姿を闇にまぎれさせる為でもあるが、警備が手薄だという情報を踏まえ、このことだ。

事前に入手した情報は、殆どが非公式な手段で得たもので、フェクトの技術は信頼しているが、情報そのものの信憑性は五分五分。罾が張られている可能性も否定は出来ない。

ウイストン家のような、事業を確立して財産を増やしていった企業貴族と呼ばれる者達なら、国の防衛機能以外にも独自で対策を講じている事も珍しくはない。

きつと、明日は防衛機能の解除に振り回されるに違いない。

できるだけ邪魔は少ない方がいい。一度失敗すると、二度目に忍

び込むのは不可能ではないが、骨が折れる。

屋敷に住んでいるのは、レイモールと曾祖父そじいであるローガンティア、専属の使用人が数十名滞在しているはずだ。後は、雇いの警備員がいる程度だろう。見つかりさえしなければ、フェクトが製作したツールで事足りるはずだ。

私は、飲み干したスープの皿とサラダの皿を奥へとずらした。ミジョテールがメインの料理を運んできのだ。

「あの、ジャンヌ様？」

「なんだ？」

フェクトが言いにくそうにしている。

まだ、ロイの依頼を断ればいいと思っっているのだろうか。

「えっと、あの、スープをお替りしてもいいでしょうか？」

「そんなことを私に聞くな！ ミジョテールに聞け！」

「は、はい」

身を竦すくめたフェクトの様子を見たミジョテールが、につこりとはほ笑んでいる。音もなく近づいた白髪混じりのルーベンスが、フェクトの皿にスープを注いだ。

まったく、緊張感のない。

緊張？

私は、緊張しているのか？ そんな、まさか。

口を拭ぬぐった布巾を膝へと戻す。

あるわけがない。

私は、ミジョテールが運んでくる次の料理を待った。

「フェクトさん、そんなに慌てて食べなくても大丈夫ですよ。まだお替りがありますからね。それよりもジャンヌ様、サラダが残っておりますよ。人参も残さず食べてくださいませ。お肌がいいのですから」

皿を蠟燭ろうそくの影に隠したつもりだったが。ミジョテールの目は誤魔化せなかったらしい。

「全部食べ終わりましたら、スズキのグリエをお出しします」

「なっ！」

振り返った私を何食わぬ顔で見返すのは、健康の為だと繰り返す
ミジョテールの毅然とした視線だった。

「食べるよ……食べれるさ、これくらい」

そう言っつて皿を持つてくると、細長く切られたオレンジ色の人参
が、私に圧力をかけてきていた。茹でてあれば幾分ましなのだが、
いかんせん生は戴けない。野菜臭いというか、泥臭い気がしてなら
ないのだ。

すると、またも気配を押し殺したようにルーベンスが近づいてく
る。

「なんだ、ルーベンス。監視しなくても食べるぞ、これくらい。た
だの人参だ」

されど人参。すくい取るだけで相当な気力を要した。人参を乗せ
た私のフォークが、皿の少し上をふらふらと浮遊している。

く、口に運べない！ 人参ごときでこんなに躊躇するとは！

「……これを」

どこから持ってきたのか、黒いような、茶色いような液体が入っ
た透明な瓶をルーベンスが差し出した。

「何だ、これは？」

振り向く私を待たずに、ルーベンスは静かに部屋の壁まで下がっ
ていた。

残されたのは、液体が入った瓶。ほんのり油が浮いているように
も見えるが。

これを使えということか。

ふたを開けて、恐る恐る人参に垂らしてみる。かすかに香ばしい
香りが漂ってきた。

眼を瞑り、意を決してそれを口に運ぶ。

「……………あれ？ 臭くない。臭みがない？」

「ソイソースでございます」

ルーベンスの声が響いた。

「ソイソース！ ルーベンス、いったいどこからそれを？」

ミジヨテールが驚いたように言う。

「ソイソース？」

「大豆という豆を発酵させて作る液体調味料のことです。材料の入手が困難なので、今では希少価値が高く高価な代物です。よく手に入れられましたね。市場では売っていませんが」

「そんなものがあるのか。これはいい！ これならいくらでも人參が食べられるな」

細長いオレンジ色の物体は、あっという間になくなった。

ミジヨテールは納得いかない様子で、メインの皿を私の前へと置いた。

食材の買い出しはミジヨテールがしていると思っていたが、ルーベンスも外出することがあるらしい。

昼間の殆どを花屋を経営する借家で過ごしているので、使用人の2人がどう過ごしているのかはあまり知らない。

というか、はっきりいって興味はない。たぶん、家事や雑用に追われているはずだ。屋敷は大きい、住人は私とフェクト、使用人の2人しかいない。20人掛けのテーブルが備え付けられているような屋敷で、雑用をこなす人間が2人というのは少ないはずだ。

だが、人を雇う金はない。ミジヨテールとルーベンスにも、高い給金は払っていない。

私たちは、ごみ溜めと呼ばれる貧民区に住んでいる、国の疎外者なのだ。

当然のように、国から支給されるはずの生活補助や援助の類たぐいはない。国の施設を利用するのも許されない。貧困の差が激しい国。

いや、国が意図的に格差を作ったのだ。

その中心に、レイモール達のような企業貴族がいる。

愚劣ぐれつな政府どもの番犬。餌を貰う代わりに、服従しているのだ。

レイモールのほほ笑みの裏に、黒い闇が渦巻いているかと思うと、胸が引き千切られる気分だった。

まだ、名前しか知らない。

私の幼少期を知るらしい、柔らかな笑顔のレイモール。

まるで、少年のような儂さを持つ、灰色の瞳の青年。

私を友人だと自信あり気に語るレイモールは、私の行いを知っても尚、同じ言葉を口にする事ができるだろうか。

最後に会った時の彼の笑顔を思い浮かべながら、私はデザート
のシャーベットを口に運んだ。

ミントの香りが、口の奥へと広がった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7401k/>

ジャンヌ ～ 願いの香りと薔薇の祈り～

2010年10月9日03時13分発行